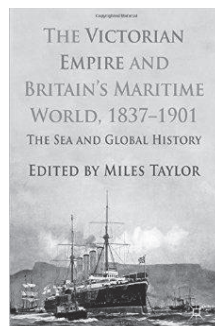


書 評

Miles Taylor, ed., *The Victorian Empire and Britain's Maritime World, 1837-1901: The Sea and Global History* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2013)



石橋 悠人

本書は「海」という観点を基軸に据えて、ヴィクトリア時代のイギリス史を検討するものである。帝国の版図と影響力の大幅な拡大が生み出したグローバルな「海洋世界」が、19世紀イギリスの政治・経済・文化・社会にいかなる影響を及ぼしていたか。著者たちはこの問いに答えるために、海軍、船、移民、奴隷貿易、海洋国／島国としての自己像などのトピックを分析する。近年、国内外の歴史学界で、海事史に大きな関心が寄せられている。本学会でも第12回大会においてシンポジウム「海の歴史とヴィクトリア時代」が実施され、評者も報告の機会を与えて頂いた。本書はロンドンの国立海事博物館と歴史学研究所が主催した一連のレクチャーに基づいて編まれている。各主題について第一線で活躍する歴史家たちが名を連ねており、イギリスにおける海事史研究の現段階をひとまず示す著作と言えるだろう。本評では、まず序章と8章の各論からなる本書の内容を紹介し、つぎに全体の意義を簡潔に述べたい。

序章 (Miles Taylor) は、ヴィクトリア時代の帝国と海との関係に内在する二面性を指摘する。海軍の世界展開による海上貿易の円滑化、海賊・奴隷売買の取締りや海戦での勝利、蒸気船時代の到来、植民地や他国との間に形成された商業網など、この時期にイギリスは海軍力と技術革新に依拠して強大な海洋帝国を構築した。その一方で、初期の蒸気船に見られた信頼性の不足、他国との対抗関係、島国の防衛に対する不安など、帝国の基盤はそれほど盤石ではなかった。この二面性への着目は、本書全体の問題意識として各論にも明確に共有されている。海洋帝国の成功・強さとその裏返しとしての不安・弱さの両面に目配りし、右肩上がりの直線的な帝国

史の再生産を回避するための有効な方針と考えることができる。

各論の内容を大胆に整理すると、海軍力、海上交通の発展、移民の増加、海洋国としての自己像という四つの主題に分けられる。まず海洋帝国の形成と持続に対する海軍の役割を直接的に取り上げるのは、第2章(John Oldfield)と第8章(Jeremy Black)である。第2章は、反奴隷制のキャンペーンが強力な正当性を帯びた運動として国内の政治文化に定着し、イギリスが国際的な奴隷解放の取り組みをリードしていく原動力となったことを解き明かす。この「文明化」の推進役を引き受けようとする姿勢と海軍力の行使という具体策によって、奴隷売買の取締活動や諸外国との連携が模索された。一方で、奴隷業者の摘発に臨む海軍士官たちは、人道主義への意識だけでなく、懸賞金獲得などの実利的な動機によって突き動かされていた。第8章は、フランス、ドイツ、ロシア、アメリカ合衆国の軍事・外交戦略との関係・対比によって、イギリス海軍の戦略と軍事力を考察する。19世紀末までイギリスの海軍力がこれらの競合国を圧倒し、奴隷貿易の取締や外交手段として機能したことは間違いない。しかしブラックの国際的文脈を重視する分析は、こうした地位が他国の建艦能力や武器製造の進化による脅威に常にさらされるものであったことを解き明かす。この競合関係を前提にすることで、イギリスが強力な海軍を維持した理由が明快に説明されている。

第3章(John M. MacKenzie)と第4章(Crosbie Smith)は、グローバルな帝国の海上交通の二面性を対比的に示すものである。第3章は、各植民地に設置された図書館、博物館、科学団体、クラブ、学校、大学などが「公共圏」を立ち上げ、それを媒介として思想や制度が伝播することで、イギリスの海洋世界に特有の文化が構築されたと主張する。ここでは蒸気船の発達に決定的な重要性が付与される。交通の円滑化が人とモノの移動性を劇的に向上させ、情報・知識の迅速な流通を可能にしたからである。しかし、第4章で論じられるように、蒸気船時代の到来は必ずしも順風満帆に実現したわけではなかった。スミスは Pacific Steam Navigation Company(1840年設立)を事例として取り上げ、失敗や故障の頻発に対峙しながら、南米大陸西岸と中米を結ぶ旅客船業に挑んだ経営者や造船師たちの姿を描く。彼らは事業案内書や新聞・雑誌記事などを用いた宣伝・

広告をはじめ、高いスキルを持つ船長の雇用などを通して、航海の信頼性を本国の投資家に強くアピールした。客船の事故、不正確な海図による定時運行の混乱をはじめ、燃料供給やメンテナンスのための施設の不備など、同社の経営に様々な問題が生じるなかで、そうした顧客・投資家の信用を獲得するための活動が客船事業の継続にとって重要な意味を持ったという。

第5章 (Judith M. Brown) と第6章 (Elizabeth Buettner) は、海上輸送・交通網の発達が人間の移動性を大幅に増進させたことの帰結について論じる。まず第5章は、この交通網を利用して英領インドの現地民が続々と海外進出を果たし、イギリス本国などで洋式教育を受けたことに焦点を当てる。ガンディーやネルーに代表されるように、19世紀から20世紀に活躍した政治的・文化的指導者の多くが外国で教育を受け、帰国後にインドの政治・社会・文化の改革を牽引した。さらに多数のインド人労働者の海外移住が、20世紀以降にも存続する世界各地の現地コミュニティの基礎を形成したことが論点として示されている。続く第6章は、インド統治の担い手である現地のイギリス人エリート層の家族と、本国からカナダなどの海外に渡る人々という二つの異なる種類の移民を事例に、交通の円滑化と移民の増加の関係を追求する。インド統治に携わる現地官僚などの家庭では、インドでの生活が教育的に不適切であるという認識があり、子弟だけでも本国に送り返し教育を受けさせることが家族の将来を見据えた合理的な選択であった。これに対して、本国の貧困層の子供たちにとって、海外移住は都市スラムの劣悪な生活環境からの解放を意味した。彼らの移住を積極的に支援したのは、子供を取り巻く環境を物質的かつモラル的な観点から批判し、スラムと虐待を行なう「墮落した」親から解放することを目指した慈善活動家であった。

最後に第1章 (Andrew Lambert) と第7章 (Jan Rüger) は、海洋国イギリスの自己像を検討する。19世紀イギリスでは、現状を理解し将来を見据えるための過去の歴史・教訓として、中世に同じく海洋国として繁栄したヴェネツィアの盛衰がしばしば題材にされた。バイロン、ターナー、ラスキン、シーラーら詩人・芸術家・批評家・歴史家が、強力な海軍を維持する必要性や強大な陸上国の興隆による脅威といった教訓をヴェネツィ

アの歴史に見出した。ラスキンはヴェネツィアの衰退要因がモラルの退廃にあったと捉え、同じ轍を踏まないよう警鐘を鳴らす。こうしたヴェネツィアの歴史／教訓がディズレーリやグラッドストーンら政治家の政策決定にも反映されていたという主張は、評者にはとても興味深く映った。第7章は、島国性がイギリスの自己理解にとって重要な概念であったことを論じる。まず島国の国民であるという思想が、ネーションの帰属意識を高めるように作用したことが明らかにされる。そして文学作品、大衆文化、政治的言説のなかで、イギリス社会が享受する「自由」の源泉が島国性にあるという主張が盛んに提起された。しかし、島国性への固執やこの概念を国民のアイデンティティの拠り所として援用する言論を激しく批判したのが、他ならぬキプリングであった。キプリングの批判は大きな論争を巻き起こし、島国であることを肯定的にのみ捉える思想を相対化する契機となった。

本書の特色は、19世紀イギリスの本国／植民地を含む帝国／グローバルな世界を横断する空間として海洋世界を設定し、その動態を多角的に描き出した点にある。編者によれば、このヴィクトリア時代の帝国史と海事史を接合する試みは、これまで研究史上の重大な欠落点として残されてきた。海軍の役割、交通網の発展による人、モノ、カネ、思想、文化の移動・循環、植民地と海との関わり、島国性や海洋国であることの自意識に立脚する国民のアイデンティティなどの論点を浮き彫りにすることで、本書はヴィクトリア時代の海洋帝国という抽象的な対象に具体的な肉づけを与えることに成功している。研究史の空白を埋める努力として、本書が少なからぬ画期性を持っていることは十分に評価できる。加えて、本書は海事史研究の間口を広げるための一つのモデルを提供している。著者の大半はいわゆる海事史の専門家として位置付けられる研究者ではない。しかし、海という焦点を軸に個別の研究主題を再検討することで、新たな視角を提起することが可能になっている。このような取り組みは、今後の海事史研究を豊かにする上で、追求されるべき方向性の一つであろう。

海事史研究の可能性という意味では、本書がヴィクトリア朝の芸術・文化・思想のなかで、海という主題が重要な要素であり続けたことを明示していることをあらためて指摘しておきたい。文学作品、詩歌、海岸線の表

象、そして艦艇の進水式などのいわゆる「海軍劇場」の実践に見られるように、本書の各論では海をモチーフにした「文化」が折に触れて論じられている。このような指摘は、あるいは文学・文化研究者のなかでは自明のことであるかもしれない。しかし、伝統的な海事史研究では、海軍の戦略・造船技術や未知の世界を目指す探検航海、さらにカリブ海・大西洋における海賊・私掠者などの主題に焦点が当てられることが多く、海に関わる文化への関心は後景に退いていた。こうして文化史研究のアプローチが海事史にも浸透し始めたことで、海が文学・文化研究と歴史研究とを架橋するための格好の舞台を提供している。本書の大きな枠組みとアプローチは、ヴィクトリア時代の文化・歴史に関する新たな対話の場を開いているのである。